



## ウエニー

ウエニーが僕の部屋にくるようになったのはこの春のこと、そう、僕の会社に松嶋菜々子さんが入ってきて、僕と机を並べて仕事をするようになった頃だ。菜々子さんはテレビでよく見る背の高い美人女優にそっくりだったから、僕たちの机の周りにはいつも男性社員でいっぱいになった。いつもパソコンができないと言っては僕をいじめる課長なんか、わざわざ新入社員の菜々子さんにお茶をいれてあげたりするんだ。僕は課長にトロい感じがテレビのユースケ・サンタマリアに似ているとって「ユースケ」と呼ばれていた。

ウエニーは猫だから、やってくるのはいつも夜だ。

それはぼくが菜々子さんと始めていっしょに仕事をした日、そう穏やかな春風がやさしく吹いていた日の夜だった。

あまりさえないユースケの部屋に、春風に乗って突然やってきた雌猫のウエニー。

彼女は実はミュージカル「キャッツ」のスターを夢見るダンサーだったが・・・

ウエニーとユースケとの一夏の恋物語

## 「ウエニー」

### 人物

ユースケ 三十歳、会社員

ウエニー 人間なら二十歳ぐらいの雌猫。ただし劇中は普通の女性の姿で登場。

### 1 春

舞台端に事務机が一つ、机の上にパソコンがおかれ、ユースケが片手に本をもってパソコンを操作している。舞台の上は全体に暗く、ユースケと机の周辺だけにライトがあたっている。ユースケの動きとは別に、ユースケの独白が聞こえてくる。

ユースケの独白 ウエニーが僕の部屋にくるようになったのはこの春のこと、そう、僕の会社に松嶋菜々子さんが入ってきて、僕と机を並べて仕事をするようになった頃だ。菜々子さんはテレビでよく見る背の高い美人女優にそっくりだったから、僕たちの机の周りはいつも男性社員でいっぱいになった。いつもパソコンができないと言っては僕をいじめる課長なんか、わざわざ新入社員の菜々子さんにお茶をいれてあげたりするんだ。僕は課長にトロい感じがテレビのユースケ・サンタマリアに似ていると行って「ユースケ」と呼ばれていた。ウエニーは猫だから、やってくるのはいつも夜だ。それはぼくが菜々子さんと始めていっしょに仕事をした日、そう穏やかな春風がやさしく吹いていた日の夜だった。

舞台が明るくなる。ユースケの部屋である。舞台の反対の端にも机がありプリンタが置いてある。舞台奥には本棚があり数冊の本が置いてある。

ユースケ ワードにエクセルとフォトショップを貼り付けて、3分間暖めてから印刷か。

ユースケが立つてプリンタを見に行く。ウエニーが登場、部屋の中を見て回る。

ユースケ　なんだ。出来てないじゃないか。おかしいよなあ。菜々子さんなら「簡単じゃない」といって一発なんだけどなあ。

ウエニー　（パソコンの前に座りながら）簡単じゃない。ユースケ　（驚いて）なんだ。お前誰だ。猫じゃないか。どこからきたんだ。

ウエニー　ウエニー

ユースケ　（上を見ながら）上？。

ウエニー　だから、名前がウエニー。来たのはアッチ。印刷。

ユースケ　アー。お前パソコン触るなって。猫にパソコンできるわけないだろ。

突然プリンタから何枚も書類が飛出して舞台に舞う。  
。ユースケが慌てて拾って回る。

ユースケ　（書類とウエニーを見比べながら）オー。ちゃんと出来てる。何でなんだ

ウエニー　「メール送信　菜々子さんへ　明日天气がよかったら映画に行きませんか　ユースケ」。フーンやるじゃない。

ユースケ　勝手に見るな。

ウエニー　写真もある。わりと美人。印刷。

今度は松嶋菜々子の写真が何枚も飛出て舞台に舞う。  
。ユースケがあわてて拾う。

ウエニー　で、どうだったの。返信来た。

ユースケ　来ない。

ウエニー　何で。

ユースケ　送信してないから。

ウエニー　（笑いながら）片思いなんだ。

ユースケ　猫には関係ない。

ウエニー　あ、これ見て。ちゃんとインターネットに出てるわ。

ユースケ　（パソコンを覗いて）「今年のキャッツ、オデューション始まる」。キャッツってあの劇団四季のロン

グランミュージカル。

ウエニー 人間のはね。私たちが年に一度だけ。秋の満月の夜に公演があるのよ。すばらしいわよ。舞台も客席も全部猫。だからミュージカルを目指す猫はその年のジエイクルキャッツに選ばれるために練習するの。

ユースケ 猫が猫の芝居やってどうするんだ。

ウエニー あら、私たちがはズつと昔からよ。昔のひとの書いた絵には私たちが歌ったり踊ったりしているのが残っているんですって。私も去年踊ったの。

ウエニーが立つて軽くステップを踏む。

ユースケ 去年は何をやったんだい。最初に出てくるシャム猫のタントミールかい。

ウエニー 違う

ユースケ じゃあ月明かりの下で歌うまっ白猫のヴィクトリア。

ウエニー 違う

ユースケ わかった。ゆかいなオバサン猫のジエニエニドッツ。

ウエニー そう！（下をむいて小さな声）の、おばさんにおっかけられるゴキブリさん。

ユースケ 何だ。キャッツじゃないじゃないか。  
ウエニー でも今年は主役をやるわ。

キャッツの音楽が流れてきてウエニーが踊り始める。  
。初めはテンポよく踊っているが途中からすこしおかしくなる。突然不協和音で音楽が止まる。

ユースケ なんだか、変だね。

ウエニー （怒ったようにユースケを見て）もう一度。

同じようにキャッツの音楽でウエニーが踊り始めるが、同じところで止まる

ユースケ 分かった。いつも右足に比べて左足がすこし遅れるからおかしいんだ。ほらこれなら大丈夫。

ユースケが踊り始める。音楽が流れる。ユースケは音楽にのって最後まで踊る。

ウエニー（拍手して）すごい。うまいんだ！

ユースケ もう一度、左足に気をつけて。

ウエニーが踊り始めるがすぐにやめる。

ウエニー 私、足が悪いからどうしても遅れてしまう

ユースケ でも主役をやりたいんだろ。だったらがんばらなからあ。

今度はユースケとウエニーが一緒に踊り始める。最初はウエニーはすこしきこちないが、だんだん調子がよくなってくる。

舞台がすこしずつ暗くなって、やがて音楽はチャップリンの「ライムライト」に変わっている。二人は寄添って音楽に合わせ踊り続ける。やがて二人の姿が見えなくなる。

## 2 秋

ユースケの独白 その夏、ウエニーは毎晩のように僕の部屋にやってきた。僕はウエニーに踊りを教え、ウエニーは僕の苦手なパソコンの仕事を手伝ってくれた。

そのうちに僕は不思議なことに気がついた。ウエニーと菜々子さんの文章はまるで同じ人が打ったみたいに、へんな癖までそっくりなんだ。例えば社長の名前は「かねこ社長」なのに「ばかねこ社長」と打ってしまった僕をあわてさせたりした。でも僕はウエニーのおかげで少しずつパソコンに強くなって、もう課長はほくをばかにしなくなつた。

夏が終わって秋風が吹くころ、菜々子さんが結婚するという話を聞いた。課長は菜々子さんにお茶を運ばなくなり、僕はメールの送信先から菜々子さんの名前を消した。

そして最後にウエニーが僕の部屋にやってきたのは、菜々子さんの送別会の日。そうそれは、その冬最初の木枯らしが冷たく吹いた日の夜だった。

舞台が明るくなる。同じように机とパソコンとプリンタが置いてある。ウエニーが後ろの本棚の本を順番にとつて眺めている。

ウエニー 「猫のヤーコブ」…「長靴をはいた猫」…「猫町通りの人々」…「猫の事務所」…「空飛び猫ヘンリー」…「猫の恩返し」…「猫のデングリ返し」……。

ユースケが登場する。ウエニーに気付く。

ユースケ 勝手に入るなつて。

ウエニー 「猫の名画物語」…。遅かったね。

ユースケ 今日は送別会だったんだ。

ウエニー （化猫のフリで）「鍋島藩化猫騒動」…。知ってる。菜々子さんの送別会。片思いだったんだ。

ユースケ 猫には関係ない。

ウエニー これは何という本？

その本は、大きな絵本ぐらいの大きさで表紙は赤、裏表紙が黒になっている。

ユースケ （本を見ながら）「赤と黒」。

ウエニー フーン。見たまんまやね。どんなお話？

ユースケ 猫を殺して皮をシャミセンにする話。

驚いてウエニーが本を元の所に戻す。

ユースケ 「キャッツ」はどうだったんだい。この間の満月の夜にあつたんだろ。

ウエニー そう。すばらしかったわ。舞台も客席も一緒になつて夜通し歌って踊ったんだわ。

ユースケ 今年は何をやったんだい。（少しおどけて）シヤム猫のタントミール。

ウエニー （ステップをふんで）違う。

ユースケ じゃあ、まっ白猫のヴィクトリア。

ウエニー （ステップをふんで）違う。

ユースケ わかった。おばさん猫のジエニエニドゥッ

ウエニー うん！（近いという顔になつて）に…。

ユースケ に、おっかけられるゴキブリ。

ウエニー （おどけたステップで）ピン、ポーン。

ユースケ　なんだ。去年と同じなんだ。

ウエニー　そうよ。でも楽しかったわ。満月の下で踊れたんですもの。でも、もういいわ。ミュージカルはおしまいい。

ユースケ　どうして。また来年もあるじゃないか。

ウエニー　私には才能がないの。それに足も悪いし

ユースケ　才能がなくなっただっていいじゃないか。主役になることだけが目標じゃないだろ。

ウエニー　でも、それじゃ意味がないし。

ユースケ　人生は意味じゃないよ、願望だよ。岩は岩になるうとしてるし、花は花になることを望んでいる。

ウエニー　いいことなのね。

ユースケ　（照れながら）僕の大好きな「ライムライト」という映画を作った人のうけうりだけだね。

ウエニー　私ね。田舎に帰ろうと思うの。そして結婚するの。

ユースケ　相手はだれなんだい。

ウエニー　いない。

ユースケ　いなかったら、結婚できないじゃないか。

ウエニー　だから見つけるのよ。わたし本当はお店屋が得意なのよ。魚屋さんなんかどう（魚屋さんのハツピを着て）さあ、今朝とれた、とれとれの魚だよ。買った買った。タイにヒラメにイソギンチャク。あ、また盗られた。やっぱりね、猫はみんな学校で魚は盗むもんだと習うんだから買うわけないか。

ウエニー　（パン屋の帽子をかぶって）魚屋はダメ。パン屋にするわ。（棒で机の端をパンパンたたきながら）さあパンはいらんかい。焼き立ての焼き焼き。シツポまで餡がいつぱい。あら、これは鯛焼きだったわ。

ユースケ　ウーン。お店の奥さんは無理なんじゃない

ウエニー　（少し怒って）やっぱり、平凡だけど会社員の奥さんがいい。そしてね、いつぱい子供を生むの。ミケや茶縞やブチやペルシャやアフガニスタン。子供たちのために優しさという粉でパンを焼いて、微笑みというミルクでスープを作るの。私の願望は人生のプリマドンナになること。

「ライムライト」が流れてくる。ウエニーが踊り始める。舞台が暗くなってウエニーだけにライトがあたる。

ウエニーが舞台一杯を使って踊り続ける。やがてウエニーの踊りとともに曲がクライマックスを迎えて静かに終わる。

ユースケが拍手をする。ユースケにもライトが当たる。

ウエニー (少し荒い息で) どう、私プリマドンナになれそう。

ユースケ もちろん。最高さ。もっりっぱなプリマドンナじゃないか。

ウエニー ありがとう。この部屋で練習したお陰ね。でももうお終い。今日はお別れに来たの。

ユースケ そうか。今日は送別会だもんな。

ウエニーがまっすぐユースケを見つめて話す。

ウエニー ユースケさん。私、ユースケさんがメールを送ってくれるのを待っていたのよ。そしたら喜んで映画を見にいったのに。そしたらユースケさんの奥さんになっていたかもしれないのに。

次第に暗くなって二人の姿は見えなくなる。溶暗。

(幕)